

この学会が産声をあげた頃、失われゆくものを射影に捉えようとする志は広く共有されていた。近代化、さらには戦後復興のたどり着いたところとして、「美しい日本と私」が人々の心をつかんでいた。そうした追い風は、数々の昔話集が商業出版として刊行されていたところにも顕著に現れている。

それから三十年。書店に平積みされた書籍の中に「民俗学の細分化、分散霧消の危機」の憂いが表明されている（ナイトメア叢書③ 二〇〇六 青弓社）。「研究者はそこで自足して、お互いに褒めあつて業績をつくるだけになっている」という学会の、具体例三団体の一つは「口承文芸学会」である（同書三七頁）。

学問を開いていくために根本を問うことは、三十年前にふさわしかろう。それは〈声〉を聞くことの足どりの確認である。ただし、口頭の伝承を文字によって記録してきた、と回顧すれば、まさに憂うべき閉塞を導くことになる。あるき、〈声〉を聞いた者は、それを文字として学問をした者である。「目に一丁字なき」幻想を抱いたこともある私たちは、しかし、常に文字を媒介させて思考してきた。〈声〉と文字そして紙が出会うところに、この学問が結像してきたのである。近代のありようの中に口承の躍動を見渡す視点を三十年目の標としたい。

## 〈声〉の採集者列伝 聞き手たちの時代

たとえば、『奥南新報「村の話」集成』（県史編さん室編 一九九八 青森県）は、しばしば黙読を拒否する。そこには、歴史的仮名遣いによる文字表記と八戸を中心とする地域の〈声〉とのせめぎ合いが刻まれている。

あるいは、誠実なフィールドワークを重ねられた佐々木徳夫氏が、野外の学問の大切さを教室で田部重治から伝えられていると述べられた（第五十一回例会、本号、川島秀一氏報告参照）、その言葉も思い出してきた。

さまざまなメディアや学問が醜酔してゆく中で、如何なる〈声〉を如何に聞いてきたのか。その百年、百五十年を、明日の学問のために振り返って戴いた。

この学会は常に国際比較の視点を忘れずにいる。確かに、柳田國男は『旅と伝説』誌上に松村武雄らの比較研究についての違和感を漏らした。その言葉を無視することなく、それでいて広い視野を可能とするためには、やはり、自らあるき、〈声〉を聞く身ぶりが不可欠であったことも忘れてはならない。

この特集は鬼籍に入られた先学より十二名を立項した。あるいて〈声〉を聞き、〈声〉の学問に取り組んだ者の列伝、ただし日本篇である。